飼育レポート

新しくサル舎に入居した仲間たち

飼育展示担当　斎藤　勇

「入居猿募集！」の看板を掲示していたサル舎の空き部屋にアビシニアコロブス2頭が入居しました。上野動物園から来たオスのトリトン（6歳）、よこはま動物園から来たメスのレイア（5歳）です。

2頭は初対面のため、寝室に檻を作ってトリトンを入れ、お見合いをして争わないか観察しました。飼育員の緊張感とは裏腹に2頭とものんびりとした性格で特にメスのレイアは初日から手差しで餌を食べたり覗き窓に来て手を出してきたりしました。

レイア（下）とトリトン

日が経つにつれ、レイアがトリトンの前で餌を食べても、檻に手を入れてトリトンの餌を取っても争いがないため6日目で同居を始めました。2頭は並んで餌を食べたりお互いの毛繕いをしたりして仲良く暮らしています。

アビシニアコロブスは野菜や果物、木の葉を食べますが、とくに木の葉が好きなので園内にある桑や柳、マサキなどを採って与えています。好き嫌いがあるため好みの枝葉を探すのに苦労の毎日です。

また、2017年7月に名古屋市東山動植物園から仲間入りしたブラッザグェノン4頭もフェンス際まで来て来園者に愛嬌を振りまいています。寒さにも慣れてきて子ども2頭は多少雪が降っても展示場を元気に動き回っています。

この頃はフェンスに設置した水戸黄門の顔出し看板の後ろに座り、お猿の黄門様になって来園者の目を引いています。

ブラッザグェノンの黄門様

ユキヒョウ リヒト、初めての秋田の夏

飼育展示担当　奥山 麻裕子

ユキヒョウはアジアの山脈、標高3000mほどの高山地帯で過ごすネコ科の動物です。気温がマイナス20℃から30℃にもなる極寒の雪山に適応した身体のつくりになっており、他のネコ科動物と比べてかなり長い体毛が全身にびっしりと生えています。

この毛のおかげで寒さにとても強く秋田の冬は全然へっちゃらで、雪の降り積もる展示場にも駆け足で遊びに出て行きます。

この気温の低い環境では武器になる厚い毛皮ですが、動物園で生活するユキヒョウにとっては利点ばかりではありません。毛が長く密集しているため皮膚が外気に触れづらく、皮膚から体温を逃がさない構造になっているため、気温が高い時でも身体を冷やす事ができないのです。暑さが苦手な動物は高温の日が続くと食欲不振を伴う体調不良、さらにひどい場合には熱中症になることも心配されます。

暑さでぐったり

当園で初めての夏を迎えたユキヒョウのリヒト（オス）に快適に秋田の猛暑を過ごしてもらうために、昨年はいくつか暑さ対策を行いました。部屋には工事現場などで使うような大型の扇風機を設置し、外展示場では肉汁を凍らせた氷を毎日与え、屋上から水を撒いて気化熱で地面の温度を下げる効果がある「打ち水」なども行いました。特にリヒトのお気に入りは肉汁氷です。この氷には、肉汁の他に様々な種類の肉や牛乳を日替わりで混ぜました。朝、リヒトは部屋から外展示場に出るとまっすぐ肉汁氷に向かって歩いて行き、長い時では30分ほども氷を舐め続けていました。昨年は体調を崩す事なく元気に過ごしたリヒトですが、夏は毎年必ずやってきますので、今年の夏もさらにリヒトが快適に過ごす事ができるような方法を考えていきたいと思います。

肉汁氷を舐めるリヒト

11年ぶりのライオンの繁殖

飼育展示担当　佐藤　正

2016年に群馬サファリパークからオスのロアーが、東京都多摩動物公園からメスのトモが仲間入りし、ライオンの繁殖に取り組んできました。昨年6月に2頭の交尾が確認され、翌月からトモの発情がストップしたため妊娠の可能性が出てきました。ライオンの妊娠期間は103日前後なので最終交尾日から計算し、9月26日を出産予定日と考え準備を進めました。

9月27日朝、いつも通りトモの室内清掃を済ませ餌を与えたところ、いつもはすぐに完食するのですが、餌を全く食べようとしないため出産が近い事を感じました。夕方4時過ぎに1頭目が生まれてから1時間半の間に2頭が生まれ授乳も確認され一安心でした。翌朝、モニターを確認すると更に1頭増えており、全部で4頭の子どもが確認されました。

生後1カ月の四つ子（10月31日）

ライオンの産子数は通常2～3頭なので、4頭目を確認した時は喜びよりも全頭が無事に育つか不安を感じました。子どもが3週齢になった10月18日に行った初めての健康状態と性別のチェックでは、オスが3頭、メスが1頭であることがわかりました。体重も生まれたときの約1kgから3kgまで成長するなど健康状態は良好でした。

昨年12月時点で体重は10kg前後となり、1月5日の雪の動物園開催に合わせて子どもたちは母親のトモと一緒に展示場に出る練習を行っています。3月の春開園時には親子の元気な姿をお披露目できるよう、引き続き見守っていきたいと思います。

展示訓練の様子（1月6日）

動物病院から

ラマの足のケガから学んだこと

獣医師　川本 朋代

大森山動物園ではラマを4頭飼育しています。ラマは南アメリカのアンデス地方などに住むラクダ科の動物です。よくアルパカと間違われますが、ラマは体が大きく筋肉質で主に荷物を運ぶ家畜で、アルパカは毛を目的とした家畜で被毛が柔らかい点などが異なります。

4頭のラマのうち、父親のタケルと息子のヒロは同じ場所で飼育しています。オス同士のためか一緒にいるとケンカをしてしまうのに、どちらかの姿が見えなくなると一方が不安になって鳴きだすため、屋外展示場ではお互いが見えるように幅広の柵で仕切って飼育しています。

ある日のこと、タケルの左前肢から血が流れていました。柵越しにケンカをして、タケルが足を柵の間から出していたところをヒロにかまれたのだと思います。たいていの傷は消毒処置やなにもしなくても自然に治癒することが多いのですが、今回はケガをした部分がどんどん腫れてきて、直径10cmほどの大きな瘤が2つできてしまいました。

治すには瘤を切開して中に溜まっている膿をすべて出さなければなりませんが、動物だって痛いことは嫌です。また、ラマのような体が大きい動物が治療を嫌がって暴れると獣医師にも危険があるため麻酔をかけることになりました。

手術当日、吹き矢を使ってタケルに麻酔をかけてから瘤の切開をしました。麻酔は動物にとって負担であり手早く処置をすることが重要です。しかし、こちらの予想をはるかに上回るほど膿がたまっており、切開した直後に大量に膿が飛び出てくるほどでした。そのため、膿の洗浄に手間取り処置の時間が長くなってしまいました。

治療の結果、タケルの足は以前と変わらぬ状態に回復しましたが、事前の想定が甘かったことが今回の反省点です。今後も今回の経験を活かし、適切で迅速な処置ができる獣医師を目指していきたいと思います。

ヒロ（左）とタケル